



“三方よし”の職場づくり

第12回

「京町セイカ」をプラスして 生み出す地域創生

京都府の南西端に位置する精華町は、昭和の終わり頃から始まった関西文化学術研究都市の開発を原動力にまちづくりが進められてきた。

しかし、2015年度に国のまち・ひと・しごと創生に基づく「人口ビジョン」を策定した頃には、学研都市建設におけるニュータウン開発が一定落ち着き、人口の動きも横ばい傾向となり、近い将来には急激に少子高齢化が進む恐れがあった。そこで、続いて策定した「精華町地域創生戦略」では、交流人口の拡大と町への愛着を持つことでの定住促進に主眼をおき、町の内外に向けての「シティプロモーション」を一体的に進めることを政策の柱とした。しかし、戦略に掲げる各施策の所管部署は複数に分かれており、相互に連携して進めることは難しいものであった。

そこで、戦略を推進するために考えたのが、前任の業務で関わった町の広報キャラクター「京町セイカ」の活用である。「ゆるキャラ」全盛の2013年度に、自治体としては珍しい公式の「萌えキャラ」として作成したもののだが、これを施策間の「触媒」として用いることにしたのである。

例えば、施策のひとつ「健康・スポーツによる地域活性化」において、ウォーキング推進に京町

セイカを「プラス」して歩数計アプリを作ることで、プロモーション効果を生むことができた。そこへ、「ふるさとの魅力づくり」を組み合わせ、大手地図業者とタイアップして町内地域資源の案内に京町セイカを「プラス

したガイドマップを作成したところ、3万部がすぐに品切れになるなど好評であった。

また、京町セイカの持つ「触媒」の効果を高めるため、音声合成機能の開発を考えクラウドファンディングによる資金調達に挑戦した。キャラクターにストーリーを持たせたPRを展開したところ、10日間で目標額を達成、終了時には目標の2倍以上の資金が集まり、大きな宣伝効果も生まれた。

現在も、京町セイカが繋ぐプラス効果で、他の自治体が進出していない、いわば「空白地帯」でのシティプロモーションを続けている。

(京都府精華町企画調整課／西川和裕)



※本コラムは「自治体改善マネジメント研究会」のメンバーがリレー形式で執筆します。

長野県白馬村(9200人)は、妊娠中や産後の女性の身体などの悩みについて無料で相談できる「産婦人科オンライン」を始めた。村内に在住する妊娠中また

保 「産婦人科 オンライン」を開始

●那須塩原市子育て支援課
0287-627117

した。助成により、医療機関での負担を気にせず必要な治療を受けられることから、疾病の重症化を防ぎ、子どもの健康維持につながることで期待される。その一方で、経常的な多額の税制負担も伴う。しかし、10月に消費税が引き上げられるため、子育て家庭の経済的負担感の軽減を図るねらいで、対象を拡大することにした。

保 こども医療費助成制度 の枠を中学生まで拡大

栃木県那須塩原市(11万7900人)は、「こども医療費助成制度」において未就学児までとなっていた助成の対象を中学生まで拡大する。